

第 1 緒論

河童大学学長 佐々木篤博士の編集した

『河童平成絵巻』の冒頭には、

「河童はいますか？」と聞かれる。

いいえおりませんとも

答えられないが、

そりゃいますよとも

答えられない。

河童は神様と同じです。」

と書かれている。

折角、河童連邦共和国の一員に加えてもら

ったが、河童そのものの正体を語る機会が余

りにも少ない。ならば、自分で研究してみよ

うと思った。しかし、大都会に住んでいると、

水辺や山里に触れる機会が非常に少ない。自

然に書物に頼ることになるが、諸説がさまざま

もあり、民俗学者毎に纏めてみようと思い付

いた。そこで20名の代表的民俗学者を選び、

その方々の考え方のエッセンスを拾い上げて見たのが、本編集物である。全て原文に直接当っており、孫引きは一切していない。そして自分の意見があるときは、コメントの中に書き入れた。ここまで来ると、臆気ながら、見ええないものが、多少、見えてきた様な気がする。

## 第2 民俗学者の見解

### 1. 南方熊楠（1867～1941）

慶応3年（1867）和歌山に生まれる。84年大学予備門に入学、86年同校を中退、渡米。アメリカ各地を遍歴し、92年ロンドンに渡り、主として大英博物館で勉学。1900年帰国後は生涯紀州を離れず、04年以後は田辺に定住して民俗学と植物学の研究に没頭した。

（1）南方熊楠著「南方熊楠日記4」八坂書房発行

①	柳	田	國	男	と	の	交	流	を	示	す	も	の	1911	(	明				
		治	44	)	年															
		。	28	ペ	ー	ジ														
		3	月	21	日	(	火	)												
			午	後	ヒ	キ	六	、	松	枝	、	下	女	と	田	村	老	母	と	
			つ	れ	、	高	山	寺	へ	詣	り	、	女	劍	舞	見	世	物	に	
			入	り	、	な	き	出	す	。	帰	る	。							
			夕	よ	り	嬉	遊	笑	覧	抄	す	。	暁	に	及	ぶ	。			
			ヒ	キ	六	角	力	取	を	女	と	思	ひ	、	女	で	居	て	帯	
			結	ば	ぬ	は	奇	也	と	い	ふ	。								
			[	発	信	]	柳	田	国	男	状	一	、	中	村	啓	次	郎	状	一
							書	留												
			[	受	信	]	柳	田	国	男	状	一	(	別	に	学	生	文	芸	昨
							年	九	月	分	被	贈	、	中	に	氏	の	「	山	
							の	神	と	ヲ	コ	ゼ	」	の	一	文	あ	り	)	
			。	30	ペ	ー	ジ													
			3	月	26	日	(	日	)	陰										
			朝	川	島	友	吉	氏	来	る	。	一	時	間	余	話	し	て	去	
			る	。	前	年	冬	古	屋	谷	に	て	得	た	る	草	も	ち	帰	
			る	。	乾	燥	品	実	碧	色	と	ヤ	ブ	メ	ウ	ガ	な	り	。	

午後広島岩吉氏来る。予川島氏を通し  
て今朝頼みし法輪寺蔵一切経を見るこ  
とを頼みに行くれし也。柳田氏へ石神  
問答、遠野物語、学生文芸、氏の山の  
神とヲコゼの文に、書入れし、おくる。  
夜紀伊続風土記抄す。  
夜松平氏婚礼の祝ひ、友人を長島氏  
(予宅の後)によぶ。大さわぎ也。芸  
妓、栄枝、若駒、十余人集る。客、油  
岩、喜之瓢(料理方)、鶴公、楠本檜  
蔵、川島友吉、床久米、高垣宗八、大  
森虎吉、榎本伊三郎、原田長円、金崎  
宇吉、糸川秀雄、星梅、戸田三綱、鈴  
木徳三等、田辺中歴々の紳士株也。  
此頃鯛当地沿岸にて大なるもの多くと  
れ、本日当町附近のみでも一万数千貫、  
約一万五千円とれる。  
[発信] 柳田国男状一、古田幸吉状一、  
松本勝状一  
[受信] 柳田国男状一、大坂毎日新聞社







民俗学研究所を設立。

(1) 柳田國男全集 2、420 ページ、山島民譚集 (1) (大正 3 年) より

柳田國男は下記の如く、河童の存在について、疑いを持っていない。

諸国河童誌の矛盾 サテモ此世ノ中ニ河童ト云フ一物ノ生息スルコトハ既ニ動カスベカラザル事実ナリトスレバ、次デ起ルハ其河童ハ動物ナリヤハタ又鬼神(キシシ)ナリヤと云フ一問題ナリ。此問題ノ解決ニ付テモ、諸国ニ於ケル河童捕獲ノ記録ハ尚且ツ有力ナル資料ナリ。今ヨリ僅カニ百余年ノ前、即チ文化文政ノ頃ハ、人間ト河童トノ交渉最モ頻繁ナル時代ナリキ。露西亜の「ガローニン」ガ遭厄日本記事ニスラ河童ノ題目ヲ看過セズ。天下ノ一奇書水虎考略(スキココウリヤク)ガ世ニ公ニセラレタルモ亦此前後ノ事ナリ。所謂太平ノ余沢ナリシカ否カ、九州地方ノ河童ニ就キ系統的ノ研

究ヲ試ミシ人アリ。此書ハ即チ其人ノ手  
ニ成リシモノ也。夫ヨリ少シ以前ニ常陸  
水戸ノ海浜ニ於テ漁夫ノ網ニ罹リテ一頭  
ノ河童捕殺セラル。其又数十年ノ前ニハ  
越前某村ニ於テ河童ヲ生擒（セイキン）  
シ之ヲ將軍家ニ献上セシ者アリ。河童ノ  
生メル子ハ頗ル人間ノ赤児トヨク似タリ  
ト謂ヘリ。更ニ寛永某歳ノ昔ニ於テモ、  
豊後ノ日田ニテ捕ヘタリト云フ河童アリ。  
此等ハ何レモ立派ナル写生ノ絵図アリテ  
今日ニ伝ハリ、殆ド疑ヲ容ルベキ余地無  
キニモ拘ラズ、何分ニモ合点ノ行カザル  
一点アリ。即チ諸国ノ河童ノ形状及生活  
ニハ地方ニヨリ余程ノ相異アルコト是ナ  
リ。例ヘバ九州筑後川流域ノ河童ハ肌膚  
（ヒフ）褐色ニシテ総身ニ毛アルニ反シ  
テ、三河越前等ノモノハ青黒クシテ毛無  
ク、所謂「オカツパ」ノ部分ニノミ人間  
ノ小児ト同ジキ毛ヲ頂ケリ。豊前北部ニ  
於ケル報告ニ依レバ、河童ハ海月（クラ

ゲ) 又ハ白魚ノ如ク水中ニ在ツテハ透明  
 ニシテ形ヲ見ル能ハズト云フニ、常陸ノ  
 海ノ河童ハ真黒(マツクロ)ニシテ而モ  
 背(セナ)ニハ頑丈ナル甲良(カフラ)  
 ヲ被(カブ)レリ。琉球ニテハ河童ヲ  
 「カムロー」ト云フ。水陸両棲ノ動物ニ  
 シテ形三四歳ノ童子ノ如ク、面ハ虎ニ似  
 テ鱗甲(リンカフ)アリト云フニ〔沖繩  
 語典〕、和漢三才図会ニ記述スル九州中  
 国ノ川太郎ハ十歳バカリノ小児ノ如ク裸  
 形ニシテ能ク立行シ人語ヲ解ストアリ。  
 自分ハ河童ノ顔色ハ青黒キモノト信ジ居  
 タルニ、陸中其他ニ於テハ其面(ソノメ  
 ン)朱ノ如ク赤シト言伝フ〔遠野物語〕。  
 (2) 岩波書店「遠野物語 山の人生」「人  
 の人生」(大正15年10月)268ページ  
 角力によって山男と近づきになったと  
 いうのもまた偶然ではなかったようであ  
 る。今日中央部以西の日本において、や  
 たらに人と相撲を取りたがるのは、川童

と話が決まっている。土佐ではシバテン  
とって芝天狗の略称かとも考えるが、  
挙動はほとんど川童と同じである。見た  
ところ小児のごとくいかにも非力である  
が、勝つと何遍でも今一番というので、  
うるさくてしかたがない。わざと負けて  
やるとキキと嬉しそうに鳴いて、また仲  
間をうんと喚んでくる。何にしても厄介  
な相手で、彼らに挑まれた為に夜どおし  
角力を取り、後には気狂のようになった  
という話が九州などには多い。それでい  
て必ずしも狐狸のごとく騙すつもりでは  
ないらしいのである。川童にせよ何にせ  
よ、どうしてまたこんな趣意不明なる交  
渉が始まったというか。それには角力そ  
のものの歴史を、今少しく遡って考える  
必要があるようである。朝廷の相撲召合  
は七月を例とし、古い年中行事の一つで  
はあったが、いわゆる唐制の模倣でもな  
ければ、また皇室専属の儀式でもなかつ

たらしい。おそらくは中央文化の或る段階において、民間の風習を採用して国技とせられたらしいことは、力士の諸国からの貢進せられたのを見てもわかる。すなわちいわゆる田舎相撲の方が起源においては一つ前である。佐渡では今も村々を代表する選手があり名乗を世襲し、会津の新宮権現でも、祭の日には村々の名を帯びた力士が出て、勝った村ではその年は仕合せ好しと信ぜられたこと、歩射馬駆けなども同じであった。すなわち祈願祈禱を専らとし怪力を神授と考え、部落互いに技を競うほかに、常に運勢の強弱ともいうべきものを認めていたのは、背後に大いに頼むところの氏神、里の神の御威光があつたため、しかも彼らは信心の未熟によってこれを傷けんことを畏れていたのである。時代がようやく進んで全民族の宗教はいよいよ統一し、小区域の敵愾心などは意味もないものにな

ったが、それでも古い名残は今だって少

しは認められる。

(3) コメント

① 柳田國男は言わずと知れた日本の民俗

学を作り上げた巨人である。その柳田が唯

一尊敬していたのが、南方熊楠である。理

由としては、熊楠が年上であること、然も

熊楠には外国へ留学の体験があるからであ

ろう。

② 柳田と熊楠の論争で有名なものは、

「山人論争」と言うのがある。山中に出現

する山男・山女の伝承を、柳田は渡来人に

追われた日本の先住異民族の末裔であると

実体的に論じ、対して南方は、山人は里人

が山中他界に幻視した共同幻想だと反論し

た。

③ ここでメモとして残しておきたいのは、

柳田が農商務省の時代にイスラエルへ調査

のために派遣され様としたところ、日本か

ら派遣されたフランス大使の反対に遭い中

止となった事である。中近東の歴史書で読んだが、柳田が行っていたら、立派なそしてユニークな記録が残されていたと思うと大変残念である。

### 3. 佐々木喜善 ( 1886 ~ 1933 )

柳田國男に知己を得、佐々木喜善が語った話を基に柳田國男は「遠野物語」を著す。金田一京助は、佐々木喜善を「日本のグリム」と呼んだ。

( 1 ) 佐々木喜善「遠野のザシキワラシとオシラサマ」中公文庫 中央公論新社 8ページ

奥州のザシキワラシの話

一 子供の時の記憶

私たちは幼少の自分、よく祖父母から炉傍話に、ザシキワラシの事を聞かせられたものである。そのザシキワラシとはどんなものかと言えば、赤顔垂髪（さげがみ）の、およそ五、六歳位の子供で、

土地の富豪や由緒ある旧家の奥座敷など  
におるものだということであった。その  
ものがおるうちは家の富貴繁昌（ふうきはんじょう）が続き、もしおらなくなると家運の傾く前兆だともいわれていたという。

私たちは初めはその話を、只の恐怖をもって聞いていたものである。けれども年齢（よわい）がやや長（た）けてくると、一般にこの種の物に対して抱くような、いわゆる妖怪変化という心持ではなく、何かしらその物の本来が、私たちの一生の運不運と関係があるようで、畏敬の念さえ払うようになったのである。世間でもまたその通りで、何処（どこ）の何某（なにがし）の家にそのものがおるといえば、他では羨望に類した多少の異服（いふく）を感じ、又本元でも吉端として、ひそかに保護待遇に意を用い、決して他の妖異におけるが如く、駆除の祈禱

や退散の禁呪（きんじゅ）などは求めぬ  
のである。（略）  
二 近頃耳で聞いた話  
実話として伝うるもの  
（一）私の村に近い綾織村（あやおりむ  
ら）字日影（ひかげ）に、佐吉殿（さき  
ちどん）という家がある。ある時この家  
で持地の山林の木を売って伐らせたこと  
がある。そのために家の座敷には、福木  
挽（ふくこびき）という浜者（はまも  
の）と、某という漆搔（うるしか）きの  
男とが、来て泊っておった。するとどう  
も毎晩、一人の童子（わらし）が出て来  
て、布団の上を渡り、又は頭の上に跨  
（またが）って魘（うな）されたりする  
ので、気味悪くかつうるさくて堪らなか  
った。漆搔きの男は、今夜こそあの童子  
を取押えて打懲らそうと、待伏していて  
角力（すもう）を挑むと、かえって見事  
に童子に打負かされてしまった。その翌

夜は同様にして、木挽の福もその者に組  
伏せられたのである。二人の男はいよいよ  
よ驚いて、その次の夜からは宿替をした  
ということである。もちろんこの家には  
昔からザシキワラシがおって、それが後  
を流れている猿ヶ石川の河童だという噂  
があったのである。今でもこの家の背戸  
(せど)には、佐吉殿の淵という淀みがある。  
てっきりその物の仕業だろうと、  
福木挽に直話(じきわ)だそうである。  
今から三十年ばかりも前のことという。  
その後この家は火災に遭うて失せたとい  
うことである。(この村の鈴木某という  
老女から遠野町の松田という友人の家で  
聞く。大正八年三月某日。私の村は陸中  
上閉伊郡土淵村。町村の名だけ書いてお  
くのは、皆同郡の内である)

(2) 同所136ページ、オシラサマ  
オシラ神に就いての小報告  
一 オシラ神に関する私の稚い記憶と

					観	念														
			野	山	に	光	る	白	雪	の	眼	に	眩	い	村	の	路	を	小	
			急	ぎ	に	行	く	と	、	歩	む	度	毎	に	足	の	下	で	雪	が
			キ	リ	キ	リ	と	軋	(	き	し	)	み	鳴	っ	た	。	今	日	は
			小	正	月	の	十	六	日	で	あ	る	か	ら	、	村	の	大	同	の
			家	に	は	、	オ	シ	ラ	遊	び	が	あ	る	筈	で	あ	る	。	
			方	々	か	ら	寄	り	集	る	取	子	ど	も	が	、	大	き	な	鏡
			餅	を	背	負	っ	て	来	た	。									
			こ	の	日	の	朝	に	オ	シ	ラ	神	は	、	常	に	秘	匿	さ	
			れ	て	い	る	奥	の	小	暗	い	室	の	、	真	黒	い	仏	壇	の
			中	か	ら	、	箱	ご	と	取	出	さ	れ	た	。	そ	の	箱	も	、
			古	い	煤	の	た	め	に	真	黒	く	、	蝦	蟄	(	が	ま	)	の
			背	の	疔	(	い	ぼ	)	の	よ	う	な	ぼ	ろ	ぼ	ろ	が	、	一
			面	に	附	着	し	き	っ	た	物	で	あ	っ	た	。	そ	の	中	か
			ら	年	に	一	度	き	り	明	り	目	に	取	出	さ	れ	る	神	様
			が	、	こ	の	家	の	巫	女	婆	様	の	手	に	よ	っ	て	取	出
			さ	れ	、	そ	う	し	て	取	子	の	若	い	娘	達	や	、	女	達
			の	手	で	、	新	し	い	花	染	の	赤	い	布	を	一	枚	ず	つ
			被	せ	ら	れ	た	。	ま	た	年	に	一	度	の	顔	に	は	白	粉
			(	お	し	ろ	い	)	を	塗	ら	れ	て	、	壇	の	上	に	飾	

(安置)られた。この白粉が、家にも、  
また取子の娘達にもなかった時であった  
ろう、私の記憶の中には、米の粉を溶い  
て、白粉代りに神様の顔につけたことも  
あった。

### (3) コメント

ザシキワラシについて、実話として伝える  
ものとして、実に54話載っており、この  
他に単に在る或はおったというだけの佐々  
木が聞いただけの話で22例載っている。こ  
の為、佐々木が収録したものに対して、ザ  
シキワラシ以外のものをも収録したのでは  
ないのかとの批判がなされている。

## 4. 折口信夫 (1887 ~ 1953)

大阪生れ

国文学者、民俗学者、歌人、詩人

歌人、詩人としては「釈迢空」を名のった。

(1) 折口信夫 古代研究Ⅱ 中央クラシッ

クス 223ページ 「河童の話」

昭	和	4	年	9	月	「	中	央	公	論	」	第	44	卷	第	9	号	で		
発	表																			
		私	は	ふ	た	夏	、	壱	岐	の	国	へ	渡	っ	た	。	そ	う		
		し	て	こ	の	島	が	、	お	よ	そ	北	九	州	一	円	の	河	童	
		伝	説	の	吹	き	だ	ま	り	に	な	っ	て	い	た	こ	と	を	知	
		っ	た	。	な	お	考	え	て	み	る	と	、	仄	か	な	が	ら	水	
		の	神	信	仰	の	古	い	姿	が	、	生	き	て	こ	の	島	び	と	
		の	上	に	は	た	ら	い	て	い	る	の	を	覚	っ	た	。	そ	れ	
		と	も	う	一	つ	、	私	は	な	る	べ	く	、	認	識	不	十	分	
		な	他	人	の	記	録	の	奇	事	異	聞	を	利	用	す	る	前	に	、
		当	時	の	実	感	を	印	象	す	る	自	分	の	採	訪	帳	を	資	
		料	と	す	る	こ	と	が	、	民	族	の	学	問	の	上	に	も	っ	
		と	も	大	切	な	態	度	で	あ	る	と	思	う	ゆ	え	に	、	壱	
		岐	お	よ	び	そ	の	近	島	の	伝	承	を	中	心	と	し	て	、	
		こ	の	研	究	の	概	要	を	書	く	、	一	つ	の	試	み	を	も	
		く	ろ	ん	だ	の	で	あ	る	。										
		こ	の	話	は	、	河	童	が	、	海	の	彼	岸	か	ら	来	る		
		尊	い	水	の	神	の	信	仰	に	、	土	地	土	地	の	水	の	精	
		霊	の	要	素	を	交	え	て	き	た	こ	と	を	基	礎	と	し	て	、
		綴	っ	た	の	で	あ	る	。											

( 2 ) 同書 232 ページ

草人形が、河童になった話は、壹岐に

もある。あまんしゃぐめは、人の村の幸

福を呪うて、善神と争うていた。土木に

関しての伝えの多い、この島の善神の名

は、忘れられたのであろう。九州本土の

左甚五郎とも言うべき、竹田の番匠の名

を誤用している。ばんじょうとあまんし

ゃぐめが約束した。入り江を横ぎって、

対岸へ橋を架けるのに、もし一番鶏の鳴

くまでに出来たら、島人を皆喰うてもよ

い、と言うのである。三千体の藁人形を

作って、これに呪法をかけて、人として、

工事にかかった。鶏も鳴かぬうちに、出

来あがりそうになったのを見たばんじょ

うは、鶏のときをつくる真似を、陰にい

てした。あまんしゃぐめは、工事を止め

て「搔曲放擲け(ケイマゲウツチヨ

ケ)」と叫んだ。その跡が「けいまぎ

崎」と言われている。また三千の人形に、

千	体	は	海	へ	、	千	体	は	川	へ	、	千	体	は	山	へ	行
け	、	と	言	う	て	放	し	た	。	こ	れ	が	皆	、	が	あ	た
ろ	に	な	っ	た	。	だ	か	ら	、	海	・	川	・	山	に	行	き
わ	た	っ	て	、	馬	の	足	形	ほ	ど	の	水	が	あ	れ	ば	、
そ	こ	に	が	あ	た	ろ	が	居	る	。	も	し	人	の	方	の	力
が	強	け	れ	ば	、	相	撲	と	り	な	が	ら	、	そ	の	手	を
引	き	抜	く	こ	と	も	で	き	る	。	藁	人	形	の	変	化	だ
か	ら	と	い	う	の	で	あ	る	。								
(	3	)	折	口	信	夫	全	集	第	16	卷	430	ペ	ー	ジ		
河	童	の	神	様		昭	和	11	年	5	月	24	日	・	31	日	
「	朝	日	新	聞	」	(	青	森	版	)							
河	童	の	神	様													
舊	江	戸	時	代	に	は	、	そ	れ	は	支	那	か	ら	傳	来	
し	た	傳	説	で	あ	ら	う	と	い	は	れ	て	居	た	。	「	水
虎	」	と	い	ふ	字	を	あ	て	は	め	て	あ	る	こ	と	な	ど
が	、	そ	の	説	を	裏	書	き	し	て	あ	る	。	し	か	し	、
今	時	そ	ん	な	こ	と	を	い	ふ	と	笑	は	れ	ま	す	。	
「	河	童	」	の	本	筋	を	た	ど	つ	て	行	き	ま	す	と	水
の	精	、	川	の	神	様	に	な	る	の	で	す	。	こ	れ	は	實
に	我	が	國	古	代	か	ら	の	國	民	の	信	仰	だ	つ	た	の

です。(略)

おしっこ様——と言っても、土地でも家柄のよい人々はちやんと「御水虎様」と申して居ります。それを訛って「おしっこ様」となったものです。その御水虎様は即、河童です。私が巡禮したのは、五所川原から十三湊までだが、それ以外にも、舊津輕藩、廣く青森縣一帶にこのおしっこ様が祀られてゐるかどうかは興味深いことですが、まだ知る機会を得ません。(略)

川祭り(河童祭り)の意味はやはり田の豊饒を祈るお祭りと見るべきでせう。壹岐の島や長崎縣の島々では今でも河童を「福の神」として崇め、これに願を掛ければ必、金持ちになると信じられてゐます。自分の命を何年後には差し上げるから金持ちにしてくれと願をかけるのです。その年限が來ると豆腐を獻じ、年限延長をする。豆腐は河童の大好きな尻小玉に

そつくりなんださうです。その年限延長も何遍か繰り返すと、もうそれ以上延長出来なくなる。すると必河童が、その人の命をとりに来る――必死ぬといふのです。その證據には、死んだ人は必尻小玉を抜かれてゐるといはれてゐます。私が大正十二年壹岐の島に旅行した時、その数日前、相當大きな焼酎屋の主人が、鋏で舌を切つて自殺したといふ事件にぶつかりました。その人は河童に願を掛けて擔ひ商人から成金になつたが、とうとう年限が来て河童に命を召されることになつた。それが恐しくて自殺したのですが、舌を切つたのは、舌は尻小玉と續いてゐるからだといふのでした。事こゝに至れば私、また何をかいはんやでした。

(4) コメント

折口の河童論は、柳田の説に沿い、河童を水神祭で祀られる神の零落であるとしている。そして、壹岐の国の草人形、藁人形

と河童の関係を論じ、近年の河童と儀礼人形との関係を論ずる嚆矢となったものと思われる。

## 5. 石田英一郎（1903～1968）

石田はウィーンに留学して民族学を学び、後に東京大学に文化人類学教学を設立した。

（1）石田英一郎著「新版 河童駒引考——比較民族学的研究」（第一版昭和22年2月、新版1965年8月）岩波文庫

①はじめに 28ページ

日本民俗学の生みの親、育ての親である柳田国男先生の巨大な業績の中でも、

かつて先生が『山島民譚集』の一書に展開された諸問題などは、この比較民族学

にむかって出された課題の大きなものであろう。本書は大正三年（一九一四年）、

雑誌『郷土研究』時代の先生の著作であり「河童駒引」「馬蹄石」の二篇をふく

む。前者はひろくわが国のすみずみにわ

た　っ　て　民　間　に　つ　た　え　ら　れ　る　河　童　の　俗　信　か  
ら　は　じ　め　て、　と　く　に　河　童　が　馬　を　水　中　に　ひ  
き　い　れ　よ　う　と　す　る　伝　説　の　普　及　に　注　目　さ　れ  
た　も　の。　他　方　ま　た、　河　童　を　猿　と　み　る　思　想  
と、　猿　を　厩　馬　の　保　護　者　と　す　る　習　俗　に　関　し  
て、　博　引　旁　証　の　論　究　を　進　め、　最　後　に　河　童  
が　水　神　の　一　変　形　と　い　う　根　拠　を　あ　げ　て、　上  
古、　馬　を　水　の　神　に　供　え　た　儀　式　の　記　憶　が、  
河　童　と　馬　ま　た　は　湖　沼　河　海　と　の　密　接　な　関　係  
を　示　す　さ　ま　ざ　ま　の　形　を　と　っ　て、　今　日　民　間  
の　信　仰　に　の　こ　っ　て　い　る　の　で　は　あ　る　ま　い　か、  
と　い　う　結　論　に　達　し　て　い　ら　れ　る。　河　童　を、  
先　生　の　卓　越　し　た　他　の　一　つ　の　研　究　題　目　で　あ  
る　水　神　童　子　の　零　落　し　た　も　の　と　み　ら　れ　る　見  
解　も、　こ　の　時　代　に　き　ざ　し　て、　の　ち　年　と　と  
も　に　確　認　さ　れ　て　い　っ　た　と　は、　後　年　先　生　み  
ず　か　ら　述　懐　し　て　い　ら　れ　る　と　こ　ろ　で　あ　る。  
②　第　1　章　　馬　と　水　神　　31　ペ　ー　ジ  
河　童　の　伝　説　は、　わ　れ　わ　れ　日　本　人　に　と　っ  
て　は　な　つ　か　し　い　思　い　出　で　あ　る。　諸　国　の　碧

潭に棲んで、ときどき人間に悪戯をはたらく、この小児のような、また猿のような怪物の話は、南は沖縄から遠く北海道にいたるわが日本列島の隅ずみまで分布し、多くの人は今なお少年の日のおどろきやすい心に、河童の恐ろしさを語り伝えられた記憶をもっていることと思う。

この河童が人間界にはたらく悪戯には、たいてい一定の形式があつて、中でも馬を水中にひきずりこもうとした話は、柳田先生が「河童駒引」の中にあげられた古今の資料だけでも、岩代、陸中、越後、常陸、武蔵、相模、駿河、三河、甲斐、信濃、飛騨、美濃、能登、山城、出雲、播磨、長門、阿波、土佐、備前など、ほとんどもわが本土全体に見出だされ、その大方が河童の失敗におわつて、詫証文などの形式で謝罪することになっている。

この河童伝説に馬がきわめて重要な役割をつとめていることは、先生がとくに注



にのみ特有のものでもなければ、またわが国にはじめておこったものでもない。筆者が蒐集して、本書第一章に記録した古今東西の資料だけでも、このモチーフに包括せしめうるものは、中国における山東二例、山西二例、四川四例、貴州、青海、甘肅各一例のほか、さらに蒙古、大宛、カシミール、吐火羅（トハラ）、クルディスタンから遠く北ヨーロッパにおよび、漢代の『別国洞冥記』や『アラビアンナイト』の中にも、このような水界の種馬の説話がのせられている。

(2) 飯倉義之編、ニッポンの河童の正体、新人物往来社、145ページ以下には下記の論評がある。

その石田の著した『河童駒引考』（一九四八）は、家畜を介しての水神と人間の交渉を語る一群の民間信仰から河童駒引伝説が生まれたという柳田の仮説に導かれ、ユーラシア大陸全般にわたる水神

		と	牛	馬	を	巡	る	伝	承	を	博	搜	し	、	そ	れ	が	農	耕	
		社	会	の	豊	饒	儀	礼	に	原	型	を	持	つ	も	の	と	結	論	
		し	た	。																
		柳	田	の	『	山	島	民	譚	集	』	に	発	想	を	得	た			
		『	河	童	駒	引	考	』	が	、	比	較	の	対	象	を	世	界	に	
		求	め	、	全	人	類	史	的	連	続	性	を	結	論	と	し	て	い	
		る	こ	と	は	、	後	に	日	本	民	俗	学	の	世	界	人	類	学	
		へ	の	発	展	を	説	い	た	石	田	の	講	演	「	人	類	学	と	
		日	本	民	俗	学	」	(	一	九	五	四	)	が	柳	田	を	激	怒	
		さ	せ	、	有	効	な	批	判	を	行	い	え	な	か	っ	た	民	俗	
		学	研	究	所	の	解	散	の	一	因	と	な	っ	た	こ	と	と	合	
		わ	せ	て	考	え	る	と	、	非	常	に	興	味	深	い	。			
		(	3	)	コ	メ	ン	ト												
		昭	和	四	十	年	(	一	九	六	五	)	に	出	た	「	新	版	河	
		童	駒	引	考	」	の	扉	に	は	「	謹	み	て	こ	の	書	を	柳	田
		國	男	先	生	の	靈	前	に	さ	さ	ぐ	」	と	あ	る	。	石	田	が
		柳	田	を	激	怒	さ	せ	た	こ	と	を	考	え	る	と	、	驚	き	で
		あ	る	。																
		6	.	丸	山	学	(	1904	～	1970	)									

元熊本商科大学教授

(1) 丸山学著「九州民俗抄」熊本商科大学

民俗学会発行 昭和40年4月 91ページ

河童

子供が丸裸になったのをよろこんでそ

のまま庭に走り出す。その子を追っかけ

て着物を着せようとする母親が、「そん

なに裸でいたらおまわりさんに叱られま

すよ」と云う。どこでも見られる図であ

る。この場合にはおまわりさんは子供を

つかまえて叱りつけるおそるべきものと

されている。だからと云って警察官その

ものがおそるべき悪者である一などと云

ったらとんでもない誤りである。このお

まわりさんの代りに河童を置いたらどう

なるか。

子供が川の中に入って却々あがって来

ない。夏とは云ってももう夕方で寒くな

り、夕飯の時間でもある。父親が土手の

上からその子を呼びもどそうとしている。

「坊や、いつまでも川に入っておると河童にひかれるぞ」と云う。どこにでもたびたび発生したであろう場面である。このようにして本来善良なる河童が大人の口によって悪者にされてしまった。気の毒なのは河童である。おまわりさんが悪者でないごとく河童も本来決して人間に害をあたえるものではなかった。それどころか巡查さんと同じように河童は善良な人間の味方であり、守り神であったのである。

左甚五郎が日光の東照宮を建てる時に日限がせまって来て却々仕事ははかどらないので困ってしまつて河童に助けを求めた話が古い本に出ている。大勢の河童の助力で工事は見事に終つた。そこで河童連中は失業と云う段取になる。河童の代表が左甚五郎に「俺たちをどうしてくれる」と迫って行く。川にでも入つて魚でも取つて食らえ、と云つて手に持つて

いた槌で河童の頭をコツンコツンと一つ宛たゝいたので頭に皿ができてしまった、と云うのである。そこで頭に皿のある河童が魚をとってくらす、と云うことになった。一となかなか筋の通った話になっている。

ところでこの話はもっと古い本にその出典がある。河伯（これがカッパの最も古い文字で、河の神を意味する）が土木工事にミンツチ使った記録がそれである。このミンツチと云うのが水中に棲む童児の姿をしたものと云う説明がついているのでまがう方なき今日の河童である。現代でも河童のことをミズチとう地方がある。

加藤清正が河童を使って築城をやり、用が済んでからこれを海中に放った話が徳川時代の本に出ている。ここでも河童は土木人夫になっていることに注意を要する。九州は古来河童伝説の非常に多い

土地であるがその中に治水土木に活躍した話が数多く含まれている。左甚五郎でも加藤清正でも誰でもよいので要は河童に仕事をたのめば大変に能率があがって大事業が易々と成就することになっている。

先年私は熊本市の郊外の農村を歩いている時に田圃の間の井手の中に笹を立て、その笹に竹の皮に包んだ握飯や乾魚がぶら下げてあるので近くの洗場で洗濯をしていたおばあさんにさりげなく「これは何ですか」と訊いてみた。おばあさんは私を見上げてにっこり笑ってみせて「これは河童さんに上げるとですたい」と答えた。河童にさんをつけて呼ぶところが注意すべきことで河童が水の守り神のすくなくともケン族であることがそれでもあきらかである。

私のつとめている大学の高橋守雄学長は水泳の達人で齢七十をこえて今でも水

に入れば大した腕前であり、現に熊本県の水泳協会長でもあるのだが矢部郷の浜町の川べりで育ち毎日家の下の川で泳いで育たれたそうであるが、その川の一部に「河童の会所」と呼ぶ淵があってどんな悪童もそこでは決して泳がなかった、と云う話をしていられる。この会所の近くの土手には小さな石碑が立っていて皆がそれを水神さんと呼んでいたこともおぼえていられる。

河童祭と云うのは全国各地に残っている。祭の日は一定していないが六月の上旬から十五日までの間が多く、それは田植の季節で田圃に水がなくてはならぬ時期である。天草では今でもこの季節に海中に四本の笹竹を立て、棚を作りその上に茄子や胡瓜など季節のものを供える。

近く長島（鹿児島県）ではもっと念を入れて竹の矢来を作って神官を招いて祭をする。同じ県の肝属郡では六月一日に河

童が亀の子を配って歩く。亀の子が足りなくなると人間の子をとって食うからこの日は人は海に入ってはならぬと云っている。水に入ってはならぬ日と云うのは人間が神をまつるために家にこもる日であったことを意味している。

(2) 丸山学著「九州民俗点描」かっぱらんど発行 昭和41年4月 78ページ

河童

場処ちがいのことを、河童が山に登ったようだと云うが九州の河童は毎年山に登ることになっている。しかもその日取がきまつていて、春の彼岸に山を降りて川に入り、秋の彼岸に川から出て山に入る、と云うところが一番多い。赤いチャンチャンコを着て、黒い帯をしめて、などとまことしやかなイメージをもつて語られているのは肥後の佐敷の町のことであるが、この移動の道筋が一定していると云うのは、どこも同じである。注意

すべきことは河童はいつでも集団をなし  
ていると考えられていることで、このか  
わいい行列からはいつでも賑やかな一定  
の掛声が聞かれる。もつとも、人はこの  
行列を目撃してはいけないことになつて  
いて、人々はこの日はみんな仕事を休ん  
で、家の中にこもり、こわごわと雨戸の  
隙間からのぞき見をすることだけが許さ  
れる。ホラ、河童がいま登りよるばい、  
と云われて、耳をそば立てながら、母の  
膝に寄りそっていたことをおぼえていま  
す、と水俣の婦人会長さんから聞かされ  
たことがある。

肥後と薩摩の境の球磨郡ではこの移動  
の日が二月一日と云うことになつていて、  
この日は今も公休日、みんな団子を作  
つて、山の太郎と川の太郎が入れ替ると  
云うので家々でお祭りをする。球磨郡で  
は河童が山に入った時の名を山ん太郎と  
云うのである。山に囲まれたこの地域で

は山小屋を訪れてくる山ん太郎の話がむ  
やみに多い。  
(略)  
球磨郡と山一重へだてた葦北郡では、  
河童が山に入った時の名を山童（ヤマワ  
ロ）と云う。  
(略)  
問題となるのは河童の山登りの観念が  
九州でも南半でつよく、北で弱いのはな  
ぜか、と云う点である。熊本県でも北半  
分では、かすかに河童は冬の間山に登る  
ものだ、とは云うが、山でどんなはたら  
きをするかについては、ほとんど伝承が  
ない。福岡県の河童は火野葦平の小説に  
も出る通り、なかなか愛嬌のある庶民  
の仲間であるが、陸に上つて人間と相撲  
をとる程度で、半年を山にこもると云う  
考えはない。全国的に見れば紀州や能登  
の山村から南九州と同じような伝承の報  
告があるが、これとても極めて局部的な、

		か	よ	わ	い	伝	承	に	す	ぎ	な	い	よ	う	で	あ	る	。	と	
		す	れ	ば	、	こ	の	南	九	州	の	伝	承	は	や	は	り	南	太	
		平	洋	を	渡	り	南	島	を	経	て	日	本	に	渡	つ	て	来	た	
		も	の	で	は	な	い	か	、	と	云	う	大	が	か	り	な	疑	問	
		を	惹	き	お	こ	す	こ	と	に	な	る	の	で	あ	る	。	(	昭	
		和	四	十	年	六	月	)												
		(	3	)	コ	メ	ン	ト												
		九	州	は	河	童	族	の	王	国	で	あ	り	、	そ	の	九	州	で	
		河	童	伝	承	を	研	究	し	た	第	一	人	者	が	丸	山	学	で	あ
		る	。	丸	山	は	、	河	童	が	冬	に	山	に	登	っ	て	山	童	に
		な	る	と	言	う	伝	承	に	注	目	し	て	い	る	。	ま	た	、	根
		拠	は	薄	い	が	、	丸	山	は	「	河	童	去	来	南	方	文	化	
		説	」	を	唱	え	て	い	る	。										
		7	．	若	尾	五	雄	(	わ	か	お	い	つ	お	)	(	1907	～		
		1994	)																	
		山	梨	県	生	れ		産	婦	人	科	・	精	神	科	医	師			
		元	岸	和	田	市	文	化	財	審	議	委	員	会	委	員	長			
		(	1	)	若	尾	五	雄	著	「	河	童	の	荒	魂	(	あ	ら	み	た
		ま	)	—	—	河	童	は	渦	巻	で	あ	る	」	堺	屋	図	書		

( 1989 年 )

。 5 ページ

「民俗学辞典」の河童の解説を引用した  
後、次の様に言う。

この解説は、河童とはいかなるものか  
という実体にはふれず、いろいろの河童  
の形式を述べているだけであって、病気  
でいえば症状の羅列である。かかる症状  
を呈する病気の原因が、何によって起こ  
って来たかを説明しないのと同様で、も  
う一つ充たされないものを感じる。

たとえば、河童の頭には皿がある。ま  
た、手は左右に通り返ける、手を切られ  
る、角力を好む、駒を引く、胡瓜を好む、  
などの事柄が、なぜ、河童譚で問題にな  
るのかを説明しなければ、完全な河童の  
研究とはいえないと思うからである。

私は、こうした河童譚に出て来る主要  
な問題やその他の諸問題も、柳田國男が  
「河童駒引」において、日本にはおらぬ

ときめつけた「蛟」にこそ解明の糸口があると考えている者である。したがって、これから述べていく本文では、河童譚の各例を順次あげ、蛟（みづち）及び蛟の基本義である交（みづち）を用いて、蛟——ミヅチ——交——よじれ——渦と、河童の本体が渦であることを証明していくことにする。

。 8 ページ

漢字の語源によると「淵とは兩岸の間に水がグルグルと廻わっている所」とある。その語源の通り、こうしたところは、表面は碧潭（へきたん）と呼ばれるように青々とした水が澱んで、静かな姿をしているのだが、内部では大きく渦が巻いており、大水にでもなると、隠れていた渦は水面にも現われて、恐しい姿を示現する。

このように、淵のあるところは、世にいう「外面如菩薩、内心如夜叉」の姿を

示す場所である。このように澱んだところ  
ろがなぜ渦を巻くかというに、川上から  
直進して来た水は、まず正面の岩に突き  
あたり、そこから左右に分かれて、逆流  
をはじめ、後続の直進して来る水勢と再  
び会い、交叉して廻転をはじめめる。ある  
いは、泥深く、上下の流速が異なるところ  
にも起こる。つまり、水にせよ空気に  
せよ、流体が交わり速度が異なると回転  
運動、つまり、渦巻が起こる。空気の場合  
合には台風とかツムジ風、あるいは結風  
などといわれるが、水の場合には渦、渦  
巻、つるまき、まいぎり、ぐず、まいま  
い、まきめ、ぎじぎじ、ぎり、ぎんぎり、  
まき、まつこみ、だえろまき、などとい  
われる。  
こうしたところで泳いだ人々の話によ  
ると、自分の泳ごうとする方向へいくら  
もがいても体は動かず、足を取られ、搦  
(から)みつかれ、手を取られて、誰か

相手がいて角力をとっているときのよう  
な幻覚にさえ落入るといふ。  
このような淵の状態から、河童とは、  
実は、この淵に巻く渦そのものをいうの  
ではあるまいか、という疑問が起こって  
来る。換言すれば、  
渦巻は河童の荒魂（あらみあたま）で、  
河童は渦巻の和魂（にきみたま）といえ  
る。この場合の荒魂とは自然現象として  
みた場合のことであり、和魂とは擬人的  
にみた場合の謂である。  
。 37 ページ  
人格の無視  
しかしながら、これらの伝説をつぶさ  
に読んでみると、この場合の人形とはど  
うやら人間のことらしい。人間なのに人  
形といわれたりすれば、人非人という言  
葉がある通り、それは奴隷のことであろ  
う。  
日本では奴隷とはいわず、これを

「童」という言葉で表わした。春日神宮造営の話でも、匠道の秘術をつくして、人形を童に変えたとある。

昔から、河童は大工の弟子だという話がある。こうした土木建築工事には、その技術者の許に手足となって働く人がいたことは、今日、トビ、テッダイ、人夫などと呼ばれている人々がいるのと同じであるが、それらの人々は昔は人間並みに扱われなかった。つまり、童とか奴などといったのである。これがどうやら、今日、民俗学上で妖怪とされている河童であり、河太郎でありカタロウであったらしい。

。232ページ

### 河童と過去の事実

河童伝説は鬼伝説とともに、日本を代表する二大伝説として、日本人ならほとんどの人が一つや二つは必ず知っている話である。これを単に面白い伝説として

話題にして行くのならそれでもよいが、何かこれには昔の重要な事実が隠れているに違いない。

泉州には、行基が建てたという水間寺という大寺があり、節分には千本搗という、たくさんの人が臼で餅をつく行事がある。ところで、堤防工事の工法には千本搗という堤防をつき固める方法がある。

水間寺が近幾川という川に沿っており、川の両岸には水を送る井堰がある農業上の重要地点であるところからみれば、おそらく、水間寺の千本搗の行事はこの工法の行事化であろう。このように、社寺の行事の中には、昔の産業上の重要な仕事が行事化して残り、伝わっているものであることを思わせるものが多い。河童伝説とてその例外ではない。

「日本書紀」仁徳期には、次のような記載がみられる。

「この年、吉備中国の山鳴河の派（かわ

また)に大いなる虬(みづち)ありて、  
人をなやましむ。時々みちゆく人、その  
所に触りて行けば、必ずその毒に被かさ  
れて、死亡す。ここに笠臣の祖、縣守、  
人と為り、勇みたけしくて力強し、派淵  
(ふち)に臨みて三つの全瓢(おうしひ  
さご)を水に投げ入れて曰く「汝、しば  
しば毒を吐きて、みちゆく人を苦しまし  
む。余、汝虬を殺さむ。汝、この全瓢を  
沈むれば、我去らむ。沈め能わざれば、  
汝を斬らむ」時に虬、鹿に化して、全瓢  
を引き入る。全瓢沈まず。即ち、劍をあ  
げて、水に入りて虬を斬る。さらに、虬  
の党類を求む。すなわち、諸の虬の族、  
淵底のゆきかう穴に満てり。ことごとく  
これを斬る。河の水、血に変わりぬ。故に  
その水をなづけて縣守淵という。」  
河童の祖先は虬(蛟)だといわれてお  
り、だから河童を退治した話であること  
になるが、これは自然現象をアニミズム

的に表現したものであって、元の形に戻せば、虬は蛟であるから、流体が交ることであって、つまりは渦巻のことである。

虬は交じれた蛟にあたる。この渦巻が岡山県の高梁川のわかれるところの淵にあり、このために川を渡る人々が難渋していたのである。

そこで、笠臣はこの渦を克服出来るかと検査をはじめた。どういう検査かというのと、三箇のひさごを渦に落としてみることであった。渦がそのひさごを引き込めば、河川改修不可能なほどの強力な水勢だということである。『日本書紀』がでたらめを書いているのなら話は別であるが、正史として、人間界にあり得べきことが記してあるのならこう解釈するのが妥当だと思う。

## (2) コメント

若尾説は、あまりにも渦に拘っていると  
の批判もある。しかし、分かり易い考え方

ではある。

8. 千葉徳爾 ( 1916 ~ 2001 )

元筑波大学教授、元明治大学教授

( 1 ) 千葉徳爾「座敷童子」『民俗学研究

——民俗学研究所紀要第三輯——』(昭和

27年10月) 72ページ

一般にザシキワラシが居るとか、家が

衰えてワラシが他の家に移ったというこ

とはよくいうことであるが、元来これが

どこからやつて来たかを説くものは少な

い。岩手県では上閉伊郡大槌町に、猿が

山から下りて来て家の守神となつた話が

あるが、これをザシキワラシと呼んでい

るか否かは明らかでない。土淵村の阿部

家のザシキワラシはフチサルというもの

だといわれるが、淵猿は河童の一名であ

る。綾織村日影の佐吉殿という家のザシ

キワラシは、傍の猿が石川の佐吉殿の淵

という淵から出た河童であるといい、よ

く角力をとつた。同じ金沢村でもカジヤ、大長谷といふ二軒の家で伝えられているザシキワラシの由来はやはり河から出て来たという。家の仕事も手傳つたというのは天龍川流域の話に近い。栗橋村栗林の小笠原氏の本家ヨコイチという家のワラシは、後に他に移つたがやはり川から出て来た。

山田町の東海林家のワラシは海から上つたカップだといひ、普代村黒崎のニイヤと呼ばれる金子家のワラシは、この屋敷に湧く清水から出たカップが家に上つたのだと説明している。この地方では海中に河童をみる人々が居るので、三才位の子供の顔をして体中に毛の生えたものが海の底におつたのを見た人がある。河童か人魚かといつてゐるが、それだから潜る時には是非ふなばたを高く叩くものだといはれてゐる（海村生活の研究）。とにかくまだこうした海の小童を、幻にえ

がき得る人々の住んでいることはわかる  
ので、水中の童形のものがすべてカッパ  
という言葉で総括されているらしいこと  
がわかる。特定の家のザシキワラシでな  
くとも、一般にそれが河童であるという  
傳承は小本川流域の岩泉町や大川村で明  
らかに認められている。青森縣五戸町附  
近でもザシキワラシは頭に皿コのせたわ  
らしだといい、顔が赤く、河童と同形の  
ものと考えている。  
鱒沢村上鱒沢にはコスズという屋号の  
家があり、ザシキワラシが居た。家の傍  
に清水（すず）があつて、片目の目高が  
住むといい、恐らく普代村のニイヤヤ、  
綾織村の佐吉殿の淵のように、この清水  
からワラシが出て来たのであろう。信濃  
の大下條村の大家で庭の池からカハラン  
ベが出て来たという傳えが思い合される。  
このコスズの家では毎朝座敷に膳を供え  
た。遠野町の高室という家でも、以前は

小豆飯をたいて膳立てをして座敷に供えた  
たそうである。ザシキワラシは小豆を好む  
むということとは、北上山地一般にいわれ  
ていることで、河童が小豆飯を好むとい  
う各地の傳承や、島原半島で龍宮からも  
らった黒猫、壹岐島では黄金をひり出す  
龜などが、いずれも小豆を食わせたこと  
も、偶然の一致ではないようである。

前に述べた栗橋村のヨコイチのザシキ  
ワラシになつた河童は、はじめ馬にいた  
ずらしてこらしめられ、その詫のしるし  
に家に上つて守り神となつたといい、そ  
の詫証文が傳わつていた。紫波郡佐比内  
村のザシキワラシも、赤顔で猿に似てお  
り、物を投げつけたり厩の馬をときはな  
したりしたというのも河童駒引に近い。

(2) コメント

千葉は河童とザシキワラシの関係を論じ、  
ザシキワラシは、家の盛衰を司る神霊とし  
ている。

9 . 中村 禎里 ( なかむら ・ ていり )

( 1932 ~ ) 東京都 生れ、 1958 年 東京都 立

大 学 生 物 学 科 卒、 立 正 大 学 教 授

( 1 ) 中 村 禎 里 著 「 河 童 の 日 本 史 」 日 本 エ デ

ィ タ ー ス ク ー ル 出 版 部 発 行 1996 年

① 同 書 32 ペ ー ジ

河 童 の 誕 生

古 代 に お い て 神 怪 な 海 の 動 物 と し て 信

仰 さ れ 畏 怖 さ れ た わ に、 お よ び 平 安 時 代

以 後 内 陸 の 淡 水 に お い て 同 様 の ふ る ま い

を 演 じ た へ び と、 近 世 の よ り 軽 い 水 妖 ・

河 童 と つ な げ る の が、 本 節 の も く ろ み で

あ る。

ま ず ト ヨ タ マ ヒ メ の わ に 神 話 に も ど り、

そ れ を 手 が か り に、 近 世 に お け る 水 神 の

出 現 形 態 の 変 化 に つ い て 言 及 し た い。

ヒ コ ホ ホ デ ミ が 海 神 の 国 を 訪 問 し て 入

手 し、 彼 の 子 孫 の 繁 栄 に 貢 献 し た 成 果 は

二 つ あ っ た。 一 つ は 兄 の ホ ノ ス ソ リ を 征

服する決めてとなった潮みつ珠、潮ひる珠である。あと一つは、海神の娘トヨタマヒメとのあいだにもうけた男児ウガヤフキアエズであった。この二つのいずれを欠いても、ヒコホホデミの一族は、列島の王の地位を獲得することができなかつたに違いない。そのうち後者、すなわち水神の血をひく男児に注目しよう。

現代の昔話「竜宮童子」においても、水中から少童が現れて人に幸をもたらす。この「竜宮童子」は、水界の美しい少女が人の男性の妻となり、二人のあいだに生まれた男児が父の家を富貴にする、という昔話「竜宮女房」と無縁ではない。

② 同書114ページ

河童が嫌うもの

河童が嫌うものを、いくつかの系統に分類することができる。第一は、仏教信仰を象徴するもの、第二は水神祭に用いられたと思われる呪物である。第三は、

両者以外ということになろう。河童の苦  
手について語られる民話の多くは、近世  
後期になってから文献に現われるようだ。  
③ 同書301ページ  
まぼろしのキリシタン  
ここで突然キリシタンが登場するのは  
場所ちがいと、けげんに思われるかも知  
れない。私にイエズス会の宣教師と河童  
との類似を示したのは、菊池清勝である。  
菊池が指摘する両者の類似点はずぎのと  
おり。  
第一に、カトリックの修道層は、トン  
スラと称し、頭頂の中央部を剃り、周囲  
の頭髪を残す。これは河童の頭部の形態  
に近い。参考にあげた図38は、十六世紀  
初期にポルトガルで制作された聖ヴィセ  
ンテの彫像である。頭髪の上にトンスラ  
の部分が見える。第二に、胴体に比して  
手足が長い。第三に、古典的な洗礼にお  
いては、新しい信仰者を文字どおり水中

に浸す。第一点については、頭髪の長さが異なるが、類似は否定できない。第二点は、B型の河童にはかならずしもあてはまらない。しかし「河童聞合」のA型河童図の一部と一致する。第三点についていうと、日本に入った諸宗派の洗礼は、たんに頭部に水を注ぐだけだった。それでも、頭部の水のおかげで力をつける河童との共通性は疑いえないだろう。

文献のうえで河童とキリシタンとの同一性を指摘したおそらく唯一の人は、三田元鍾である。けれども三田は、河童が中国起源と断定し、これを前提としたうえで、中国南部において合羽を着用したフランシスコ会の宣教師が河童イメージの根源だと主張する。全般に三田の論点には不明確な部分が多いが、菊池とおなじく中剃りのヘアスタイルや洗礼の風習を念頭においていた、と推察される。

また熊本県八代市の吉田朝雄は、海外

から上陸したヨーロッパ人の紅毛・異  
貌・服装、および皿のような帽子から河  
童のイメージが生まれたのではないか、  
と語っている。

私は菊池のヒントを起点として、河童  
とキリシタンの対応関係がほかにも存在  
することに気がついた。すなわち河童体  
験の分布とキリシタンの分布の並行性が  
顕著である。戦国時代、キリシタン大名  
支配地の主要部は、有馬義直・晴信の有  
馬藩、および大村純忠の大村藩を中心と  
する肥前と天草、さらに大友義鎮の豊後  
一帯であった。織豊時代には、有馬・大  
村が肥前にあったほか、小西行長が肥後  
宇土に、毛利秀包が筑後久留米に、黒田  
孝高が豊前中津に、毛利高政が豊後日田  
に、それぞれ居城した。そして近世の文  
献において、人が河童と出会った体験が  
もつとも頻繁に語られるのは、筑後・豊  
前・豊後・肥後の五か国であった。

( 2 ) コメント

中村禎里は、「河童は実在しない。ある時期・ある地域の人の心の産物である。だから人の心を訪ね歩く一所不住の旅における一つの仮の宿が、河童の住む川であったのも偶然ではないだろう。」(あとがきより引用)と、決めつけている。この部分が、一番賛同しかねる。

10. 斎藤次男 ( 1932 ~ )

新潟県生れ。松竹でプロデューサーとして活躍。映像製作者。

( 1 ) 斎藤次男著「河童アジア考——カッパは人か妖怪か」( 1994 年 5 月発行 ) 株式会社彩流社 111 ページ

河童の原型は香港の水上市民？

この夏、河童のふるさと閩(びん)の国(福建省・浙江省)を訪ねていこうと心を決めたのだが、なぜか、ぐずぐずと出発をのぼしつづけていた。

というのは、これまでの河童を探す旅  
の中で、河童といわれる存在が東アジア  
地域の水界民（すいかいみん）にその根  
を発しているということは、多くの研究  
からほぼ見当のついていることだった。  
そして、それら水界民が日本へ渡ってき  
て、古代史に登場するいわゆる海洋民の  
神とつながっていることもほぼ見当のつ  
いていることであった。にもかかわらず、  
私自身としてはもうひとつ釈然としない  
ものがたちこめていた。  
それは、私がこれまで映像製作をナリ  
ワイとしてきた人間であり、学術専門の  
学者でなかったからであろう。なぜなら  
河童というものをテレビの画面に実際に  
登場させてみたいというオソロシイ願望  
を秘かに持ち続けていたからである。  
よく映像業界の用語として使われるの  
に、「それをどういう風に絵（画面）に  
するの？」という表現がある。そして私

も数年前『河童は人か妖怪か』というテレビを創った時、次回の作品には必ず生きた河童を画面に登場させてやる、と心の中で思い込んでいた。同時に、河童を本当に画面に登場させることができれば「河童は本当にいるのか」という素朴な、そして繰り返されてきた、重要問題に直接答えることができる。しかも、それをこの自分の手でやってみたいという野心がずっと巣喰っていたことは事実である。そんなある日、突然、不思議な確信がひらめいた。それは次のような文を読んでいた時のことだった。

「『蜃（たん）』という名称が陸上の住民が水上居民を指して『侮蔑』の意味もこめて、種族名のように用いるようになったのは、文献の上では宋代（960～1279）以後のことであり、それも主として広東から海南島にかけての海域におけるものが対象となっていた。」（伊藤 亜

人『中国と日本の漂海漁民』

ここでいう蜃は「蜃民」のことであり、あの香港などにいる水上生活者のことを指している。そして「蜃」という言葉には陸上生活者が水上生活者をバカにしているという意味がこめられているという。

普通に読んでいれば見過ごしてしまいそうな文だが実はこの「侮蔑」という言葉こそがこれまで探し続けてきた河童成立の最も重要なキーワードになるのではないか、そういうことが突然頭の中にひらめいたのである。念の為、手元の広辞苑を引いてみる。

「蜃民」とは「中国南部の大河川や沿海地方の水上生活民の総称。漁業・水運などに従事。政府の陸上への定住政策により現在は著しく減少。蜃民。水上居民。」と書いてある。ここでも同じように賤民視された水上生活者として蜃民のことが表現されてある。



国	学	院	大	学	日	本	文	化	研	究	所	所	属	嘱	託	研	究	員		
(	1	)	石	川	純	一	郎	著	「	河	童	の	世	界	」	(	昭	和	49	
年	)	時	事	通	信	社	発	行												
①	19	ペ	ー	ジ																
3		私	は	河	童	を	見	た												
		河	童	は	単	に	空	想	や	伝	説	の	世	界	に	住	む	だ		
		け	で	は	な	い	。	こ	の	文	明	の	世	に	そ	ん	な	も	の	
		が	お	る	は	ず	は	な	い	と	否	定	的	な	考	え	も	多	い	
		こ	と	で	あ	ろ	う	が	、	河	童	を	見	た	と	い	う	者	は	
		大	勢	い	て	、	実	在	を	信	じ	て	疑	わ	な	い	。	北	津	
		軽	郡	は	川	倉	の	浅	利	ツ	ル	エ	と	い	う	若	婦	人	は	、
		あ	る	年	の	お	盆	過	ぎ	に	川	刈	り	に	行	っ	て	河	童	
		を	目	撃	し	て	い	る	。	夕	闇	の	迫	る	金	木	川	の	河	
		畔	に	ち	ょ	う	ど	仔	猿	の	よ	う	な	も	の	が	、	丸	く	
		な	っ	て	しゃ	が	ん	で	い	た	。	近	所	の	子	供	か	と		
		思	っ	て	咳	払	い	し	た	ら	、	振	り	返	っ	た	そ	の	顔	
		は	真	赤	で	あ	っ	た	。	途	端	に	体	中	が	ザ	ワ	ザ	ワ	
		し	た	と	い	う	。	ま	た	、	弘	前	市	の	田	中	ト	モ	と	
		い	う	老	媪	は	、	ま	だ	中	津	軽	郡	新	岡	の	実	家	に	
		あ	っ	た	こ	ろ	の	田	植	え	の	と	き	、	川	端	の	柳	の	

気にいるのを見た。赤い猿面で髪は長く  
茶色、猫眼をしていたという。  
数年前のNHKテレビ番組『新日本紀  
行』にも河童の目撃者が登場している。  
陸中と遠野の藤田福蔵という年寄りで、  
早池川から流れ出る上猿ヶ石川において、  
普通の犬ほどの河童を子供のころ友だち  
と二人して見たという。黒い頭の猫のよ  
うな面付きをした、体の赤い生き物が流  
れをよぎって向こう岸の柳の下の深みに  
没したそうである。〈NHKテレビ—岩  
手県遠野市〉  
陸奥十和田の太田に住む中渡耕一郎と  
いう者は、何十年も前に二度ながら河童  
に行き合っている。五月初めのころ、わ  
が家の苗代で苗取りをしているとキャッ  
キャッという声があるので腰を伸ばして  
見ると、水車のそばの土手の崩れ穴に猿  
のような面をした子供のようなものが立  
っていた。それが歩いたと思われる田の

中に水掻きのついた足跡があったという。  
それから七月の初めに太田堰の端を歩い  
ている際キャッキャッと叫んでいるもの  
があるので、その場に立ちどまって見て  
いると、体が黒くて赤ら顔の、髪をさら  
っと被った十ばかりの子供のようなのが  
堰にあがって来ようとしているではない  
か。河童だな、と思いついたときには先  
方でも人影に気づいたか、いきなり水の  
中に飛び込んでしまったという。（『十  
和田村の民俗』——青森県上北郡十和田  
村太田）

② 同書 72 ページ

1 河童の誕生

河童は一体どこから来たか？ その起  
源については人形化誕生説と渡來說、お  
よび牛頭天王（ごずてんのう）の御子神  
とが行なわれている。化生説にも川へ捨  
てた来迎柱などの木屑より化したという  
ものと、番匠に加勢した人形より化した

との二つの説がある。いずれも社寺の建

立縁起となっていることが特徴である。

陸奥八戸は櫛引八幡宮の社殿は左甚五

郎の築造と伝えられ、八甲田山のコンガ

ラ沢から来迎柱として伐り出された櫛の

木を、尺の取り違いからむだにしてしま

い、ヌキを通したまま馬淵川へ捨てた。

そこで木屑は左甚五郎に何とかしてくれ、

と頼み込んだけれども聞き入れられず、

その方は尻でも食え、と怒鳴ったので河

童と化して人畜の尻子玉を狙うようにな

ったという。(略)

## 2 河童の渡来

本朝化生説に対して震旦渡來說が行な

われている。先ごろ球磨川に立てられた

河童渡来の碑はこの説に基づいたもので

ある。

昔河童は唐天竺の黄河の上流に大族を

なして住んでいた。その中の一族が郎党

を引き連れて黄河をくだり、海を渡って

九州に来、九州一の大河である球磨川に住むことになった。そこで河童族が繁殖して9千匹に達した。九千坊と称する族長は乱暴者で、田畑を荒らしたり、女子供をかどわかしたりするので、肥後の殿様・加藤清正が怒って、九州の猿をみな集めて攻め立てた。河童と猿とは大変仲が悪く、河童にとっては手ごわい敵であったから降参した。肥後を立ち去る約束でようやく詫びを入れ、やがて、隣国筑後は久留米の殿様・有馬公の許しを得て筑後川に住むようになり、水難除けの神の水天宮のお使いとなったという。河童はお宮のお堀にも住んでいて、神主が手を叩くと水底から浮きあがって来るという。(『あしなか』三七一一福岡県久留米市)

この話は近世の『本朝俗諺志』や『倭訓栞(わくんのしおり)』にも載っている。(略)



ックスに整理している。

12. 宮田登（1936～2000）

神奈川県生まれ。東京教育大学大学院博士  
課程修了。元筑波大学教授、元神奈川大学  
教授。

（1）宮田登著「日本を語る 13 妖怪と伝  
説」吉川弘文館 平成19年2月10日128ペー  
ジ

七 人間と自然の調和を伝える河童伝説  
河童 牛久沼の河童は、小川芋銭の紹  
介記事や『河童百図』によって早くから  
知られていたが、近年、市立図書館で公  
刊された武川秀男氏の切り絵が一層鮮明  
なイメージを世に伝えることになった。

日本の代表的妖怪である河童は、水辺  
の多い土地ならばどこにでも出現してく  
る異形である。共通して五、六歳の童子  
姿で、背丈は一メートル以下、垂髪、赤  
黒い皮膚、やせて裸身、手足は長く、爪

はとがって、生臭い。図像的には、中国の水虎と称する水棲動物に似ているとの説もある。頭の凹みが河童の皿とよばれる特徴で、頭髪が渦を巻いており、一種のつむじ状の部分らしい。妖怪は本来超自然的領域に属する異形であり、こちらに住む人間に対して、さまざまな警告を発する役割を担ってきた。

河童について言えば、水界の精霊あるいは水界の主として、神聖な池や沼、淵の水底に潜んでおり、もし人間がむやみに聖域を侵犯しようとする、ただちに奇怪な姿を現わして、人間を脅かすのである。言葉をかえていうならば自然を破壊するような行為を人間がとると、それに対抗するのが妖怪のつとめなのである。

地域開発のプロセスで、池や沼が埋められたり、聖なる水が汚されたり、魚が棲めなくなったり、いわゆる公害が生じたりすれば、妖怪化した水界の主が出現する

という信仰がその背景にはあったのである。

よく、水遊びの最中溺死した子供は河童に「尻子玉を抜かれた」と言われたが、これは水死者の肛門周辺の括約筋がゆるんで、穴が開いた状態を指しているらしい。水中の渦に巻きこまれたり、深みにはまってしまおうと、河童に背後から尻をつかまれ引きずりこまれたと解釈して「尻子玉」の表現になったのだろう。

牛久沼の河童 江戸時代に平地農村では水利、灌漑設備が整い、新田開発がすすめられると、溜池も激増した。そこで遊ぶ子どもたちの水難事故も増え、大人たちはその対策に苦慮した。そうした事情の反映が、河童の話には示されている。

牛久沼では、剛力の農民が河童をとらえてしまおうが、河童と相撲をとって、それを打ち負かす怪力の男がどの村にもいたらしい。元はといえば、怪力男は、水

神に仕える家筋の出であり、かつて並はずれた力を水の精霊から授かったのであり、相撲をとるということは、水神を異界から呼び出す神事の一つだった。

牛久沼の河童はとらえられて松に縛りつけられてしまいうが、河童松とか河童杉というのは神樹のことで、そこに神霊がよりついたことを、「河童松」の伝説は示している。

河童は水の精霊としてそこで丁重に祀られると、今度は村の守護霊となり、村人を水難から救う立場になっていく。以前は六月と十二月が水辺で厄払いをする水神祭りの時期であったし、きゅうりは六月の畑作物として供えられる供物の一つだったのである。

牛久沼の河童松のエピソードにも、自然と人間の調和を保つ思いがよく残されている。

(2) コメント

宮田は、河童を妖怪とする学者の典型的な一人である。

13. 小松和彦（1947～）

東京都生まれ。東京都立大学大学院（社会人類学）博士課程修了。現在、国際日本文化研究センター教授。

（1）小松和彦著「異人論——民俗社会の心性——」ちくま学芸文庫、253ページ

私が注目する河童の属性の一つは、河童の手足が簡単にストンと抜けるということ。これと関連する説話として河童は人形が変じたものであるとする話が、九州から東北まで広く分布しています。

河童についての説話は三系統あり、あとの一つは祇園の御子であるという説、それから九州には中国から渡来してきたものだという説があります。しかし、分布的にいえば、河童人形起源説話が圧倒的に多いようです。

人形起源譚の一例を挙げますと、大工が困難な仕事を呪術でつくった人形の助力でついに完成させるが、仕事が終わると人形は用済みということで川や海、あるいは池に捨てられる。困難な仕事をするのには人形をつくって手伝わせて、用がなくなると、川に捨てる。そのとき、その人形は大工に向かって「どうして暮らしたらいいか」と聞く。すると「人の尻でもくえ」と答える。その人形がやがて河童となって人の尻を取るようになる。この説話で私がとくに注目したいのは、左甚五郎とか武田の番匠とか飛騨の工とかいった神格化された大工の棟梁たちが登場してきて、彼らが、どこそこの寺社をつくる、どこそこの家、どこそこの池をつくるというときに、人手が足りないので藁人形あるいは土の人形、匏屑の人形をつくって働かせ、終わったあとにそれを捨て、その捨てた人形が河童になる、

というような河童起源が広く伝わっている  
ということなのです。

(略)

藁人形とか土人形が河童になったという  
のは民俗学者たちがよく耳にすることの  
ようです。つまり河童は大工の弟子や、  
治水・土木の手伝いなのです。

そこで、河童の属性は次のように整理  
しようと思われれます。

(一) 手足が簡単に抜ける。

(二) 人形である。

(三) 川辺、水界に棲んでいる。

(四) 頭の形が童子形である。

(五) 河童は膳や椀を貸してくれたり、

ときには魚などを贈ってくれる—こ

れは人間とのある特別な関係ができ

たときにそういうことをする。

(六) 骨折の薬、その他特殊な薬を持っ

ている。

(七) 河童を守護神としていろいろな水

神祭りをしたり占いをしたり、それを司る神官の家筋も九州地方にあった。

(八) 人に憑いて病気などの災いをもたらす。子どもを水界に沈める。

(九) 水神の御子もしくは使者・媒介者として働く。

(十) 河童という文字は近世になって登場してくる。近世以前の文献のなか  
に河童という言葉を見出すことはできない。

(十一) 河童は牛や馬を水界に沈める。こういった特徴を重ねてみますと、民俗社会のなかでの河童のイメージの主要な構成要素のかなりの部分が「川の民」についての属性に深く結びついたイメージをもっていると思われてくるのです。

(2) コメント

この人は、一貫して鬼、妖怪、呪術、憑依、異人殺し、村はちぶなどの日本文化の

闇	の	部	分	よ	り	日	本	文	化	を	論	じ	て	い	る	。	小	松	
説	は	、	当	然	の	こ	と	な	が	ら	、	河	童	は	妖	怪	の	一	
つ	で	あ	る	と	し	て	い	る	。										
14	.	小	馬	徹	(	1948	～	)											
		神	奈	川	大	学	外	国	語	学	部	教	授						
(	1	)	小	馬	徹	著	「	河	童	相	撲	考		—	—	歴	史	民	俗
資	料	学	の	エ	チ	ュ	ー	ド	—	—	」	歴	史	と	民	俗		13	
卷		1996	年		神	奈	川	大	学	日	本	常	民	文	化	研	究		
所	論	集	13		134	ペ	ー	ジ											
①	は	じ	め	に															
		河	童	の	き	わ	だ	っ	た	特	徴	は	、	小	柄	な	体	軀	
		に	似	合	わ	ぬ	力	自	慢	で	、	倦	む	こ	と	な	く	人	間
		に	相	撲	を	挑	ん	で	来	る	こ	と	で	あ	る	。	し	か	し
		な	が	ら	、	考	え	て	み	れ	ば	、	日	本	の	妖	怪	の	中
		で	も	な	に	ゆ	え	に	河	童	が	特	に	相	撲	を	好	む	の
		だ	ろ	う	か	。	柳	田	国	男	は	、	「	私	た	ち	の	不	思
		議	と	す	る	の	は	、	人	の	南	北	に	立	ち	分	か	れ	て
		風	俗	も	す	で	に	同	じ	か	ら	ず	、	言	葉	は	時	と	し
		て	通	訳	を	要	す	る	ほ	ど	違	っ	て	い	る	の	に	、	ど

うして川童という怪物だけが、全国どこへ行ってもただ一種の生活、まるで判こで押したような悪戯を、いつまでも真似つづけているのかという点である」〔柳田 1989 : 87〕と言い、また「何ゆえ川童が人を見るといつでも角力を取りたがるのか。今まであまりありふれた話だから注意する者もなかったが、考えてみると奇妙なことである」〔柳田 1989 : 89〕とも述べた。この点については、既に幾つかの民俗学的な説明がある。だが、それらは必ずしも得心の行くものとは言いがたい。

② 同書 135 ページ

1 - 1 河童研究と民俗学

河童という水の妖怪は、江戸時代にはその存在の真偽をめぐるかまびすしい論議を巻き起こした。図らずも、シーボルトまでがその渦中に巻き込まれている。明治時代末からは、小川芋銭がトリック

		ス	タ	ー	を	思	わ	せ	る	飄	逸	な	イ	メ	ー	ジ	を	造	り	
		出	し	、	こ	れ	以	来	河	童	は	日	本	で	最	も	愛	さ	れ	
		る	架	空	の	生	き	物	と	な	っ	た	。	そ	し	て	、	工	業	
		社	会	化	の	行	き	詰	ま	り	と	環	境	の	荒	廃	・	疲	弊	
		が	誰	の	目	に	も	露	に	な	っ	た	こ	の	二	十	世	紀	の	
		末	に	お	い	て	は	、	水	域	を	中	心	と	す	る	自	然	・	
		環	境	運	動	の	文	化	象	徴	に	も	な	り	っ	つ	つ	あ	る	。
		少	な	く	と	も	こ	の	数	世	紀	の	間	、	河	童	ほ	ど		
		強	く	日	本	人	の	心	を	魅	了	し	、	豊	か	な	幻	想	と	
		自	由	な	空	想	を	誘	い	、	様	々	な	思	い	を	仮	託	し	
		て	表	白	す	る	手	段	と	な	り	、	ま	た	諸	々	の	観	念	
		の	象	徴	と	な	っ	て	き	た	生	き	物	は	他	に	あ	る	ま	
		い	。	そ	れ	は	ま	た	、	河	童	を	巡	っ	て	あ	り	と	あ	
		ら	ゆ	る	荒	唐	無	稽	な	言	葉	が	飛	び	交	い	、	夥	し	
		い	数	の	怪	し	げ	な	論	議	が	幾	重	に	も	積	み	上	げ	
		ら	れ	て	来	た	と	い	う	こ	と	で	も	あ	る	。				
		③	同	書	138	ペ	ー	ジ												
		1	－	2		事	実	、	真	実	、	現	実							
				庶	民	に	と	っ	て	の	心	の	「	真	実	」	(	truth	)	
				は	、	事	実	(	fact	)	と	は	決	し	て	同	じ	で	は	な

い。事実の一つだとしても、真実は幾つもある。そして、現に生きて日々ある人々にとって重要なのは、事実ではなく、あるいはそれ以上に真実なのである。人々のそうした心の真実のあり方を突き止めることは、人文・社会系の学問の最も重要な課題の一つであろう。そして、民俗学の使命もまた、その同じ課題を庶民の身に最も近い所から読み解いて明らかにして行くことにあるのだと思う。

実際、真の問題は、河童を語ることが「歴史（文書）なき歴史学」に似たものにならざるを得ないことにあるのではないだろう。それは、河童のごとき通俗な文化現象に目を凝らして怯まないことを一旦選び取った以上、否応なく引き受けざるを得ない前提条件となるはずだ。問題は、いかに真実に即しながら事実と真実との絡み合いを解きほぐして、歴史の「現実」（reality）を抉り出して行くか



しながら、時代的な遷移を示す複数の起  
源から複合的に説明しようとしている  
[中村 1996 : 72—81]。彼は、最も古い  
文献的な証左として、『本朝食鑑』巻十  
に出る「もしこれ（河童、小馬注）に遇  
えば、かならず先に腕を挙げ拳を掉うて  
急に彼の頭をうつときは、すなわち斃  
る」を挙げる。そして、格闘技と同義で  
あった古い相撲の観念から見れば、これ  
なども河童と相撲の関わりを示すものだ  
とする[中村 1996 : 74]。とは言え、中  
村は、河童が相撲を好むという観念が普  
及するのは比較的新しい時代のことであ  
ると見ているようだ。

しかしながら、筆者は遥かに古い時代  
に両者の本質的な結びつきの淵源を求め  
たい。即ち、河童が相撲を取りたがると  
いう属性は、ノミノスクネ（野見宿禰）  
とタギマノクエハヤ（当麻蹶速）の相撲  
神話と不可分の関わりがあると推定した



索した本講ではある。しかし「歴史（文  
書）なき歴史学」即ち、「資料なき民俗  
学」の超克は難しい。

15. 神野善治（1949～）

文化庁文化財調査官

（1）神野善治「建築儀礼と人形——河童起  
源譚と大工の女人犠牲譚をめぐって——」

日本民俗学会発行 日本民俗学146号 1983

年

① 同論文15ページ

はじめに

本論の目的は「大工と人形」にかかわ  
る二つの説話を比較検討を通して、建築  
儀礼に伴う人形の役割について論じるこ  
とである。

まず二つの説話のひとつは、「大工を  
助けた藁人形」とか「藁人形の建てたお  
宮」あるいは「河童の起源譚」として知  
られる説話であり、各地の有名社寺など

にちなんだ伝説になっている場合の多い話である。もうひとつは、上棟式の由来譚、あるいはその式の飾り物などのいわれを説く話で、「大工の女房」や「大工の娘」の犠牲譚となっている説話である。従来、二つの説話は、別々に扱われてきたが、その構造や要素の対応を検討すると両者は非常に密接な関係にあることがわかってきた。これらが本来ひとつの話ではなかったか、ひとつと言わないまでも、同じ主旨に出た話であった可能性を示し、このことによって、家屋に関わる靈魂の問題に及んでみたい。

② 同論文 20 ページ

すると捨てられた人形が大工に向かって、これからどうやって暮らしたらよいかと問う例が多い。これに対して大工は「人の尻でも食っている」「人間の尻を食らえ」と言い渡す。おまけに槌で頭を叩くという話が加わっている例がいくつ

もある。捨てられた人形はやがて河童となり、人の尻をとって（つまり水難にあわせるといふ災いをもたらし）、槌で叩かれたところが頭のお皿になったのだとか、藁人形が河童になったので手がぬけるのだと言ったりしているのである。

以上の話は、建築に際し大工が人形を作り手伝わせたと内容を持っている。実際にロボットのようなものを作ったと考えることはできないから、ここでいう人形が、いったい何を示しているのかが問題になる。これを現実的・技術史的にとらえて、車地（しゃち）などの建築材と考えたり、労働力としての被差別民（河原者・童）を象徴するという若尾五郎氏の興味深い説がある。しかし、筆者はこの説話を素直に受けとり、大工が実際に藁人形などを作ることがあり、そのことを説明しているのではないかと考えている。言いかえると、建築儀礼として

大工が人形を作り、祀ることがあって、それがとだえたあとも、その印象が説話の中に生きつづけているのだと考えるのである。

### ③ 同論文 33 ページ

#### 五 二説話の比較

ここでこの稿の目的である二つの説話の比較に及んでみたい。

まず第一の説話。飛騨の匠や左甚五郎

あるいは竹田番匠などといった腕の立つ

大工が、寺や宮などの大事な建物を請け

負う。ところが工期もせまり、人夫も足

りないといった困難な条件に出遭う。こ

の大工は人形を作ってこれに手伝わせる。

この助力により工事は無事完成するが、

完成してしまおうと、人形は頭を叩かれ、

川に捨てられ、それが河童になって人の

尻をとるようになってしまったという話である。

一方、第二の説話。飛騨の匠や左甚五

郎あるいは竹田番匠などといった腕の立

つ大工が、こともあろうに大事な建物の  
大事な柱を短く切りそこねた。この困難  
に大工の女房（娘）が知恵を授ける。こ  
の助力により工事は無事完成するが、女  
房（娘）に助けられては大工の恥と、そ  
の女人は殺されてしまい、それが亡霊と  
なってその後の建築を妨げるようになって  
た。それで必ず棟上げにはその女人を祀  
るようになってしまったという話である。

こうして二つの説話を比較すると、両  
方の基本的な構造は次のように一致する。

- ① 腕のいい大工が建築に際し困難な事態  
に出遭う。
- ② これを助力するものがある。
- ③ 建築は無事完成するが、大工はその助  
力者を殺すか、見捨てる。
- ④ 以後、その祟りがある。

これをそれぞれの要素について対比す  
ると上表のようになるだろう。

こうしてみると、大工の助力をする女

人と人形とは、話の構造の中で同等の位置付けで語られていることがわかる。大工の仕事を助け、しかし捨てられ、そのことによって祟るために大工がその後も祀ることになった霊。大工の女房（娘）や人形は、その祀られる対象を具体化したものだったと言えまいか。

大工の女人犠牲譚の方は建築儀礼の説明譚であることは事実である。しかも儀礼に祀られる人形が現存し、その説明譚ともなっている。一方、河童起源譚（大工を助けた藁人形の話）の方は、建築儀礼の説明譚としては、機能してはいないようであるが、その構造が前者と一致し、要素にも共通した対応が認められるから、同じ主旨を伝える説話とみなされる。したがってこの背景に建築儀礼があると考へうるという結論に達するのである。つまり大工が儀礼として人形を作ったことが、この説話の背後にあることを伝えて

おり、その意図をも暗示していると言えないのではないか。

では、そこで大工が人形を作ったのは何のためであったのか。それは、建築儀礼で（とくに棟上げに）祀られるべき神霊のためであることは、まず間違いない。その神霊の性格をとらえるためには、まさに先述の大工の女人犠牲譚をもう一度検討しなければなるまい。

(2) 神野善治「木子としての傀儡子」形代・傀儡・人形、日本歴史と芸能 第11巻 平凡社 1991年

① 上記書籍130ページ

大工を助けた人形河童は、わが国の代表的な妖怪として津々浦々にその伝承が残されているが、そのイメージは地域によって微妙に違っている。その中で、河童の属性として、広く語られているものに、その腕をひっぱると抜けるということがある。それは、

たいてい河童が元来は藁人形だったとい  
う伝承と一体のものになっている。この  
人形と河童の関係は、「大工を助けた藁  
人形の話」、すなわち、いわゆる「河童  
起源譚」の説話として語られていて、九  
州から東北地方まで全国にわたって広く  
伝えられ、わたしがこれまでに集成した  
類例だけでも、三十例ほどに達している  
(神野善治「建築儀礼と人形——河童起  
源譚と大工の女人犠牲譚をめぐって——  
」『日本民俗学』146号、1983年)。  
これらの伝承では、左甚五郎や飛騨の  
工匠(たくみ)、竹田の番匠といった神  
格化された大工の棟梁が主人公として登  
場し、有名な社寺や宮殿などを建設する  
のであるが、人手が足りないとか、工期  
が足りないとかいう困難に遭遇して、藁  
人形や匏屑(かんなくず)などの人形を  
作り、これに息を吹きかけて命を与えて  
使役し、無事に完成させることができる。

ところが、仕事が終わったのち、人形たち  
を川に捨てたのが河童になって人の尻を  
とらえるようになったという説話である。

人形の頭を玄能（げんのう）で叩いたの  
が、頭の皿になったという話を加えてい  
るところもある。

わたしは、この説話の背景のひとつと  
して建築物の造営に伴う呪術的な儀式  
（建築儀礼）に、人形が実際に作られ用  
いられたことがあっただろうという意見  
をこれまでに述べてきた。

## ② 同書籍 131 ページ

この話と先の「河童起源譚」とは、と  
もに神格化された大工が主人公で、その  
建築事業の困難に対して助力を果した者  
が犠牲になり、そのために崇りをなして、  
結果的に祀られるようになるという共通  
した話の展開（構造）をもっている。そ  
して話の主旨においても、建築にかかわ  
る何らかの神霊の性格を示す内容を持つ

という点で共通することを指摘できる。

その神霊と考えられたのは、大工たちが日々、建築のために切り刻み、削り続けながら「犠牲」を強いている建築用材に宿る精霊ではないだろうかというのが、現在のわたしの考えである。すなわち、木匠たちの仕事を成り立たせている樹木の（木霊）に対する心意がこれらの説話に示されているのではないだろうか。

かつて若尾五雄氏は、河童のイメージの背景には、河原を活動基盤とした土木技術者のイメージがあったのではないかと指摘し、さらに、先の「河童起源譚」で河童が人形に由来するといわれるのは、土木関係の道具やかれらそのものを「人形」と見たためではないかということを示された（「河童の荒魂」『近畿民俗』56、1983年。のち『河童の荒魂』、1989年、堺屋図書、に収録）。

たいへん魅力のある説と思いつつも、

土木関係者や土木用具が人形にたとえられるような認識が、伝承として、あるいは歴史的史料として示されない以上、容易には受け入れがたい主張だと思ってきた。

ところが、その後『異人論』で知られる小松和彦氏が、その論説の一環として河童をとりあげ、この若尾説をもとりこんで、河童のイメージが生成されて行く上で、その構成要素の主な部分に、「河原の者」とか「川の民」と言われる蔑視された人々の実像があったのではないかという主張を、近世の記録を根拠にして示されたのである（「新しい妖怪論のために」『創造の世界』53、1985年、小学館）。

(3) コメント

「木子としての傀儡子」と「建築儀礼と人形」は、連動する論文である。本来は、河童の研究者ではないそうであるが、河童の

研究に与えた影響は大きい。

16. 矢口裕康

この人の経歴については、全く分からない。  
しかし、下記引用の論文は、その研究  
姿勢として貴重なもので、下記に是非引用  
しておきたい。

(1) 矢口裕康「日向の河童伝承——伝承存  
在と意識——」日本民俗学第133号（昭和55  
年2月）日本民俗学会発行  
。22ページ

本論考の発想は、昭和三六年六月二〇  
日発行『日本文学論究』第十九冊、特集  
“民俗文学”における、坪井洋文氏の  
「河童伝承と農神信仰について」の次の  
一節からである。

坪井氏は、河童が神としての田の神・  
山の神の二面性をもっていると指摘し、  
次のようにしめくくっている。「河童伝  
承のように昔話にも妖怪にも民間信仰に

も、いろいろの形で語りつがれているところを広く比較検討して、採取された河童の伝承がなぜその村落では昔話となっているのか、または民間信仰として存在しているのかという資料の位置づけを他の民俗資料との関連においてとらえてみてはじめて、昔話なり民間信仰なりの独自の研究領域内で分析することができるのではなかろうか。」

いうまでもなく、宮崎県は河童の伝承が濃厚な地である。この地で、そのことの一部が描きだせればと思うしだいである。その濃厚の地である証は左のようなことからいえる。

その第一としては次の話からうかがわれる。

資料 I

日向の国でもカッパは各地に住んでいまして、カワタロ・ガワタロ・ヒヨスボ・ヒヨスンボ・セコ・カリコサマなど、

いろいろの名で呼ばれています。中でも高千穂付近にはカッパの住みかが多く、五ヶ瀬川の上流には五つの支流がありますが、その流れの一つ一つにカッパの頭目がいた、と伝えています。七折川には綱の瀬の弥十郎、山裏川には川の詰の勘太郎、岩戸川には戸無の八郎右衛門、押方の二上川には神橋の久太郎、三ヶ所川には廻淵の雑賀小路安長、この五匹のカッパがその頭目である、といわれています。

このように、五ヶ瀬川の五つの支流に、それぞれ河童の頭目が住んでいる話も、その一端をあらわすものといえそうである。

。同論文 30 ページ

資料 III

むかしむかし、平田組にそれはそれはすき通るような美しい娘がおったげな。ところがその娘さんにこれもまた、この

村では見かけない、いきな若い男が毎晩  
のように遊びに来たげな。そしてその男  
が「よい所につれて行くから行こうでな  
いか」といったげな。その話を聞いて、  
家の者が不審に思うて、法者どんに聞く  
と、「それはひょうすぼうにつかれています  
る」といったげな。それから村の人々が  
騒ぎだして、寝ずの番をすることになっ  
たげな。村の人たちは、ひょうすぼうは  
鉄がきらいだということを知り、娘さ  
んには鉄の髪さしをさかせて、自分たち  
は寝ずの番をしたげな。ところがある晩  
のこと、昼の疲れのせい、村の人たち  
がうとうとと眠ったらしい。そのすきに  
連れられたのだろう、みんなが目さま  
すと、娘の姿が見えなくなつたげな。村  
の人々は大騒動となつて、所々方々を捜  
してまわつたげな。ところが娘さんは、  
ひょうたん田の下の柳原川に、腰から下  
は川の中につかたまま死んでいたげな。

娘	さ	ん	の	鉄	の	髪	さ	し	と	、	草	履	が	上	の	山	の		
中	に	そ	ろ	え	て	お	い	て	あ	っ	た	げ	な	。					
河	童	躰	(	む	こ	)	入	り	の	話	で	あ	る	。					
(	2	)	コ	メ	ン	ト													
資	料	Ⅲ	の	哀	し	い	河	童	躰	入	り	の	話	は	、	和	田		
寛	著	「	河	童	伝	承	大	事	典	」	(	岩	田	書	院	発	行	)	
に	も	、	出	て	い	な	か	っ	た	。									
17	・	安	藤	操	(	1936	～	)	民	俗	研	究	家						
18	・	清	野	文	男	(	1949	～	)	民	俗	写	真	家					
河	童	の	呼	び	名	は	、	多	数	あ	る	こ	と	は	知	ら	れ		
る	と	こ	ろ	で	あ	る	が	、	上	記	2	名	の	者	の	分	類	は	、
分	か	り	易	い	の	で	、	下	記	に	引	用	す	る	。				
(	1	)	安	藤	操	・	清	野	文	男	著	「	河	童	の	系	譜	」	
(	1993	年	9	月	発	行	)	五	月	書	房	発	行						
113	ペ	ー	ジ																
河	童	の	呼	び	名	は	実	に	多	様	で	あ	る	。	石	川			
純	一	郎	著	『	河	童	の	世	界	』	(	時	事	通	信	社	)		
に	よ	れ	ば	、	八	十	前	後	の	数	に	な	る	と	い	う	。		
そ	れ	ら	を	私	な	り	に	、	語	源	を	推	定	し	て	分			

類してみると、いくつかの類型になる。

① 「川の童」系統

○ カッパ・カワッパ・ガワッパ・ガー

ッパ・コウッパ・カワラワ・ガワラ

ッパ・ガラッパ・カアラッパ・カワ

ワラシ・カワランベ

② 「川の子（小僧・法師）」系統

○ カワゴ・カワコ・ガゴ・コウゴ・ゴ

ンゴ・オンガラボウシ・カワコボ

シ・カンコロボシ・カワコゾウ・カ

ワラコゾウ

③ 「川の太郎」系統

○ カワタロウ・ガタロ・ガアタロウ・

ガタロウ・ガーロウ・ガオロ・カワ

ノトノ・カワヤロウ

④ 「水の主（神）」の系統

○ ミズシ・ミズシン・ミズチ・ミンツ

チ・ミントチ・ニントチ・フンド

チ・ミツツドン・メドチ・メドツ・

メットウウチ・シイジン・セイジ

				ン	・	ス	ジ	ン	コ	・	ス	ジ	ン	ド	ン					
		⑤		「	水	虎	」	の	系	統										
				○	ス	イ	コ	・	セ	コ	・	セ	コ	コ	・	セ	コ	ボ	ウ	・
					セ	コ	ン	ボ	・	セ	ッ	コ	ウ	サ	マ	・	オ	シ	ッ	コ
					サ	マ	・	シ	イ	ッ	コ	サ	マ							
		⑥		「	猿	」	の	系	統											
				○	エ	ン	コ	ウ	・	エ	ン	コ	・	カ	ワ	ザ	ル	・	フ	チ
					ザ	ル	・	テ	ナ	ガ	・	テ	ガ	ワ	ラ					
		⑦		「	習	性	」	の	系	統										
				○	コ	マ	ヒ	キ	・	ケ	ツ	ゴ	・	シ	リ	コ	ボ	ウ	シ	・
					シ	リ	ヒ	キ	マ	ン	ジ	ュ	ウ							
		⑧		「	亀	・	す	っ	ぽ	ん	」	の	系	統						
				○	ダ	ン	ガ	メ	・	ド	ン	ガ	ス	・	ガ	メ	・	ド	チ	・
					ド	チ	ガ	メ	・	ド	チ	ロ	ベ							
		⑨		「	カ	ワ	ウ	ソ	」	の	系	統								
				○	カ	ワ	ウ	ソ	・	カ	ワ	ッ	ソ	・	カ	ワ	ソ	・	ウ	ソ
					ゴ	ロ	ー	ノ	ビ	ア	ガ	リ								
		⑩		「	天	狗	」	の	系	統										
				○	ス	イ	テ	ン	グ	・	シ	バ	テ	ン						
		⑪		「	鳴	き	声	」	の	系	統									



った。

現代で河童といえ、二、三歳ぐらいの子供のように見え、頭髪はオカッパで頭上に水をためる皿があり、目は黄色くまんまるで、口はとがって鼻は犬のようで、体は濡れてヌルヌルとして生臭く、緑色の肌には斑点がついており（トノサマガエルを連想する？）、背中には亀のような甲羅（こうら）を持っていて、手足の指間には水掻（みずか）きがあり、小さな尻尾があるとされる。

だがこれは現在の河童像で、このような姿が成立する以前の河童はもっと多様な姿が併存していた。（略）

鼈（すっぽん）を「ガメ」と呼ぶ発音から亀にまちがわれ、後世の河童は鼈ではなく亀の甲羅を持つに至った。このように、河伯（かはく）と混同される以前の古いタイプの河童像には甲羅が存在しないようである。

「カッパ」とは「河ワッパ」の訛りで、ワッパやスッパは「童」（わらわ）の転じたもので、子供をののしって悪く言う語である。河童の名称（方言）は江戸時代初期から現代まで四百以上が確認できるが、現在は河童の標準語化（東京弁化）にともなって、地方の方言は駆逐され消去されて、その姿形の多様性も忘却されて単一化（統一化）されてきた。岩手県遠野の河童は赤ら顔をとされるが、遠野で売られている河童の人形は現代的に単一化された緑色である。

実際の河童の起源は次のように多様であり、異なる性質、姿形があった。

①半魚人タイプ＝全身が鱗（うろこ）におおわれている。中国の水虎をモデルとしている。山猫と人間を掛け合わせたような顔。禿（はげ）頭もしくはオカッパ頭。東京都浅草の曹源寺の河童図像、鹿児島県川内市中村町の戸田観音社のガラ



雌となす」とある。四国や中国地方では河童の方言として川獺（カワウソ、カワッソウ、カワソ）と猿猴（エンコウ、エンコ、フチザル、テナガ）の両方が併存する。②の猿人タイプの亜流とも考えられる。

④魍魎（もうりょう）タイプ＝河童として成立する以前の原型的な妖怪。姿形は三歳ぐらいの小児のようで、赤黒色の肌をして、赤目で耳は長く、髪の毛は美しいという。河童の頭髪（オカッパ）は魍魎の頭髪をモデルにしていると思われる。（ただし河童は長い耳をもたない。）死人の内臓を好んで食べるという。水辺に棲むともいう。（略）

北九州地方では、河童は壇之浦（山口県下関市）で滅亡した平家一門の御霊の化身とされ、水天宮の眷属（けんぞく）とされている。京都の八坂神社（祇園社）と平家一族とは縁が深い。

⑤ 火車（かしゃ）タイプ = 火車は罪人である亡者を地獄へ護送する獄卒とされていたが、魍魎と同一視されると化け猫（山猫）の妖怪とされ、埋葬前の死者の肝（内臓）を食べるために盗む（襲撃して奪ってゆく）とされた。出現する時は黒雲に乗り、激しい雷雨になるともいう。河童が人を溺れさせ、尻を取る（肛門から内臓を食べる）という伝承は、この魍魎と同一視された火車の性質を帯びたからのようだ。

⑥ 山猫タイプ = 火車には化け猫、つまり中国の山猫の妖怪の影響があるが、日本で唯一、山猫が棲息する対馬（対馬山猫）には、川虎という河童の方言があり、伝承による川虎の習性が対馬山猫の生態に似ている。（略）

江戸時代には四国や東海地方でも川虎の名が知られていた。川虎を語源とする河童の方言は、四百ある内のおよそ半数

をしめている。日本本土には山猫が棲息  
しないため、代用として川獺がそのモデ  
ルとなったと思われる。また川虎は水虎  
の別名であると考えられる。虎・山猫・  
川獺・鼬などは水辺に棲む性質があり、  
山猫や川獺は魚を捕らえる習性がある。  
⑦ 鼈（すっぽん）タイプ＝河童が河伯と  
同一視され、かつ河伯の眷属である鼈と  
同一視された結果、甲羅を持つ河童が誕  
生したと思われる。（略）  
鼈タイプは江戸時代中期になると、猿  
人タイプなど他のタイプをしりぞけて主  
流となり、現代に至っている。現在の河  
童は亀の甲羅を背負っているが、ほんら  
いは誤解である。  
⑧ 海獣タイプ＝江戸時代には、川獺（か  
わうそ）に対して、海獣というものがい  
るとされた。じっさいに川獺は川ばかり  
ではなく海岸地帯にも棲息していたが、  
日本海側では海獺とはアシカやトドなど

		の	海	獣	で	あ	っ	た	。	江	戸	時	代	の	河	童	の	凶	像
		の	中	に	は	、	海	獣	の	類	を	モ	デ	ル	に	し	て	模	写
		し	た	も	の	と	思	わ	れ	る	も	の	が	あ	る	。			
		⑨	天	狗	タ	イ	プ	=	静	岡	県	で	は	川	天	狗	、	高	知
		県	で	は	シ	バ	テ	ン	(	芝	天	狗	)	と	い	う	河	童	の
		性	質	に	よ	く	似	た	天	狗	が	知	ら	れ	る	。	芝	天	狗
		と	は	下	っ	端	(	ぱ	)	(	格	の	低	い	)	の	天	狗	と
		い	う	意	味	で	あ	る	。	秋	か	ら	春	に	か	け	て	は	シ
		バ	テ	ン	で	、	春	か	ら	秋	に	か	け	て	川	の	中	に	棲
		ん	で	猿	猴	(	河	童	)	に	な	る	と	も	い	わ	れ	る	。
		天	狗	も	ま	た	相	撲	好	き	で	、	河	童	と	似	た	よ	う
		な	性	質	が	あ	る	。	河	童	の	顔	は	烏	(	か	ら	す	)
		天	狗	の	顔	に	も	似	て	い	る	。							
		⑩	水	神	タ	イ	プ	=	青	森	県	に	は	メ	ド	チ	(	メ	ト
		チ	・	メ	ド	ツ	)	、	北	海	道	に	は	ミ	ン	ツ	チ	と	い
		う	方	言	が	あ	る	が	、	こ	れ	は	水	霊	(	ミ	ツ	チ	)
		を	語	源	と	す	る	。	北	陸	地	方	や	九	州	南	部	地	方
		な	ど	に	は	ス	イ	ジ	ン	(	ミ	ズ	シ	・	ミ	ズ	シ	ン	)
		な	ど	の	方	言	が	あ	る	が	、	水	神	、	水	使	、	水	主
		な	ど	を	語	源	と	す	る	。	元	来	は	土	着	の	水	神	信

仰であったものに、あとから河童の伝承  
が混じり合ったものが多く、河童の生物  
的な様子はあまり語られない。(略)

⑪ 人間タイプ = 河童はさまざまな水辺の  
動物の姿に擬せられているが、これは河  
原や水上で暮らしていた人々を妖怪視し  
ていたことからおこったふしがある。  
(略)

河童が人間の仕事を手伝ったという話  
も多い。また河童を水死した人間の怨霊  
とする地方もある。

⑫ 小僧タイプ = ふつう河童の類は二、三  
歳ぐらいの子供のようで、大きくても十  
歳以下である。また人間の子供に変身し  
てたぶらかすともされる。東北地方では、  
座敷わらしという家に住みつく精霊は、  
河童が人家に住んだものとする伝承が多  
い。座敷童子がすみつくとその家は富み  
栄え、反対にその家を出るとたちまち没  
落するといわれる。(略)

結論として、河童は単一の妖怪ではなく、多種多様な起源をもって融合した、水辺に棲む妖怪の総称（現在では統一化した）なのである。

### 第3 結語

1. 本編集物は、民俗学者の考え方に絞って纏めたものである。（1）明治期まで、全国各地で河童がどの様に執らえられて来たのかとか、（2）諸外国では河童は、どの様に執らえられているのかとか（Encyclopedia Britanica には、Kappa という項目があり、日本の民間伝承としている）、（3）生態学からの研究とか、色々な分野があり、暇を作っては、調べて見たい。

2. 本編集物は、平成23年3月11日（金）午後2時46分、東日本大震災の直後に一応完成した。この東日本大震災によって、尊い

